

Title	社会変動に伴う人名の変化における地域（都市／農村）差の一考察：中国山東省の峰村李氏と辛町李氏の調査に基づいて
Author(s)	王, 愛静
Citation	大阪大学言語文化学. 16 P.155-P.167
Issue Date	2007-03-31
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/77876">http://hdl.handle.net/11094/77876</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 社会変動に伴う人名の変化における地域(都市/農村)差の一考察

—中国山東省の峰村李氏と辛町李氏の調査に基づいて—\*

王 愛静\*\*

キーワード：社会変動、人名の変化、地域（都市/農村）差

本文以同为青岛李氏宗族，而分别居住于农村和城市的峰村和辛町为对象，调查了建国前后直到现在的两村李氏的人名的变化情况，并通过比较明确了两村人名变化的共同点和差异。然后，通过实地考察了解个人的起名过程和当时的社会状况，来探讨影响两村人名变化，特别是使两村人名变化产生差异的社会文化背景。

青岛李氏在建国前是宗族伦理规范很严格的一个宗族。在起名上，也严格遵循自古以来字辈排行，而女性因其社会地位的低下大都没有正式的名字。20世纪特别是20世纪40年代末建国以来，随着土地改革、文化大革命、经济改革等一系列社会文化变革，宗族文化日渐衰落，按字辈起名的传统受到很大冲击。字辈名不断减少，不受字辈约束的单名不断增加。同时，在人名用字上也趋向多样化和追求佳字佳意。而以前没有正式名字的女性，随着走进工厂或公社的大集体生产，也都有了自己的正式名字。以上变化趋势同样体现在峰村和辛町的人名形态的变化上。

两村所不同的是，由于辛町地处城市，早期就从事了工业生产，人员流动和信息交流都比较多，所以女性较早就有了自己的名字，且一字名出现较早，人名用字也更加丰富多彩。而特别值得一提的是，尽管峰村作为李氏发祥地，人口很多，可文革以来，男女字辈名的比例都低于辛町。本文就此现象，从村落的历史·位置·人口构成，国家政策的影响，作为宗族象征的祠堂·墓地的不同命运以及对待宗族活动的两村李氏的不同反应进行了考察。结果表明，在两村人名变化的差异上，外部客观因素的影响虽大，而人们的主体行为和领导人物的作用也起到不可忽视的作用。

### 1 はじめに

中国における人名に関する研究は、20世紀以降、ダーウインの進化論主義、言語学、文化人類学の方法を取り入れるようになり、姓氏の本義（袁裕業 1936、徐俊元・他 1985、王泉根 1988 など）、漢民族の姓名（趙瑞民 1988、王大良 1999、徐健順・辛憲

\* 对在社会变动中人名变化的城乡差异的一点考察—以山东省峰村李氏和辛町李氏的调查为例—  
（王爱静）

\*\* 中国海洋大学外国語学院

1999 など)、少数民族の姓名(范玉梅 1981、徐悉艱 1991、八巻 1994 など)などについて多くの研究がなされてきた。中でも、張聯芳(1992)は人名の変遷に着目し、「姓名という符号は社会構造が大きく変化する際、その形と機能、意味も変化しており、ある側面から社会性質の転換を反映できる」(張聯芳 1992:3)と指摘している。中国では建国後、大きな社会変動が起った。それに伴う人名の変化に対する関心も 90 年代以降に見られ、いくつか研究されている(中生 1999、王泉根 2000a)。また、王愛静(2004)は、中国建国以来の人名形態の変化および国家政策や政治運動が人名の変化に与えた影響について考察した。しかしながら、これらの研究は、いずれも対象地域を農村に限定しており、都市の人名変化は明らかにしていない。本稿は農村部と都市部の両方を調査し、社会変動に伴う人名形態の変化を比較し、名づけに影響をもたらした背景、特にその相違点の背景を明らかにすることを目的とする。

## 2 調査対象の概況

本稿では山東省青島市の二村、農村地域にある峰村<sup>1)</sup>と都市地域にある辛町を対象にする。この二村の大多数の人々は青島李氏宗族に属している(以下それぞれ峰村李氏、辛町李氏と呼ぶ)。同じ宗族の村を対象にする理由は、峰村李氏と辛町李氏が、同じ宗族文化背景を有しており、名づけ方においても類似しているため、地域差をより明確に考察することが可能ではないかと考えるからである。

峰村は青島市の西郊にあり、都市中心部より 40 キロくらい離れている。明朝の万暦年間、李氏一族が膠州から移転してきて「峰村」を作り、「青島李氏故里」と称し、青島李氏の発祥地とされている。現在は 21 世目まで子孫を繁栄させ、12 のセグメントに分けられている。峰村李氏は村総人口は 2000 人ほどで、そのうち、李氏人口が最も多く、総人口数の 90% を占めている。李氏以外の人口は、ほとんどほかの村から来た娘婿の子孫だそうである。峰村は今でも老人の間で「父子莊」と呼ばれているように、「単姓村」である。村民は明代から農業と製塩業で自給自足の生活を送っていたが、共産党政権設立後、田んぼも塩田も公有化され、社会主義革命に巻き込まれた。90 年代以来は、農村での工業化が進んでおり、峰村の近くに工業園が建設され、村民の多くは工場勤務になっている。

辛町は青島市正区の北部に位置している。李氏先祖は峰村の建村後、辛町に移住し、子孫を繁栄させたが、通常、辛町李氏支族と称している。現在、辛町李氏の人口は約 1000 人であり、村全体の 3 分の 2 を占めている。李氏のほかに、張・王・曹などの他姓人口も多い。1897 年のドイツ人侵入以前、辛町の人々は主に農業、制塩業と漁業で

<sup>1)</sup> プライバシーを保護するために、宗族の名前、市単位以下の地名はすべて仮名である。個人情報を提供した人物の名前については、考察の対象とするものを除き、基本的に仮名とする。

生計を立てていた。ドイツ侵入後、辛町の産塩区や農地には工場が建てられ、一部の村民は工場で働くようになった。更に、30年代、日本は村の住居区の回りに機械や紡績工場などを建てた。これらの工場には大量の女性労働者が必要になったため、辛町から多くの女性を募集した。1949年10月、中華人民共和国成立時、工場で働く人口は既に村の人口の約80%を占めていた。

建国以前、峰村李氏と辛町李氏支族とも宗族の祠堂、墓地を有していた。峰村李氏の祠堂は李氏本祠として規模が大きく、1963年に倒壊されるまで、110年の歴史を持っていた。中には始祖および亡くなった峰村李氏先祖のすべての位牌が祭られ、毎年新生児の命名や族譜の編纂などの宗族事務もここで処理していた。辛町李氏の祠堂は辛町に移住してから第6世代目の時に建てられたが、それまでは毎年峰村の祠堂にて祭祀活動を行ったようである。また、命名上、両村とも伝統的な輩行字命名法<sup>2)</sup>を保っていた。

### 3 調査方法

本稿の調査方法は現地での聞き取り調査とアンケート調査を主な方法とし、住民簿や族譜・地方誌の調査を補助的な方法とする。住民簿や族譜に記載された人名を集計し、人名形態の歴史的变化における二村の比較を行うと同時に、人々から具体的な名付けの経緯と当時の事件を聞き取り調査し<sup>3)</sup>、社会変動がそれぞれ農村部と都市部の宗族活動や命名行為に及ぼした影響を考察する。

### 4 人名形態の時期的変化

王愛静(2004)では、主に人名の年代的变化を考察した。人名の変化と社会変動との連動をより明確に示すため、本稿では、中国の歴史を五つの時期に分け、人名形態を時期ごとに集計することにした。第1期は社会主義国家の設立以前(1949年10月以前、以後建国以前と略す)、第2期は建国初期の社会主義革命時期(1949年10月～1966年5月)、第3期は文化大革命時期(1966年6月～1976年10月)、第4期は経済改革開放前期(1976年11月～1991年12月)、第5期は改革開放深化期(1992年1月以降)である。以下は峰村李氏と辛町李氏の人名形態の時期的変化を考察するが、紙幅の都合上、輩行名、一字名、女性の人名用字を取り上げ、それぞれの時期的変化を考察し、さらに

<sup>2)</sup> 輩行とは一族の始祖からの世代の順位を表すものである。輩行字は一族単位で決められた世代ごとに名前に使われる漢字あるいは部首である。輩行字を名前に入れて名づける方法は輩行字命名法といい、その名は輩行名と呼ばれる。たとえば、李氏宗族の第6代の輩行字は「応」で、「応」を入れてつけた名前「応科」はすなわち輩行名である。

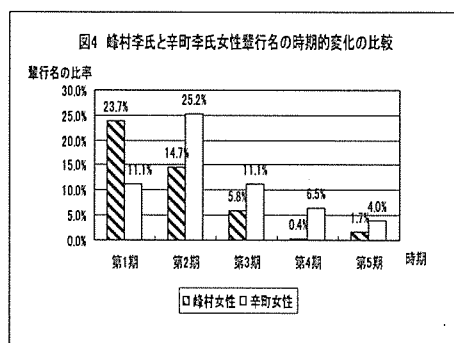
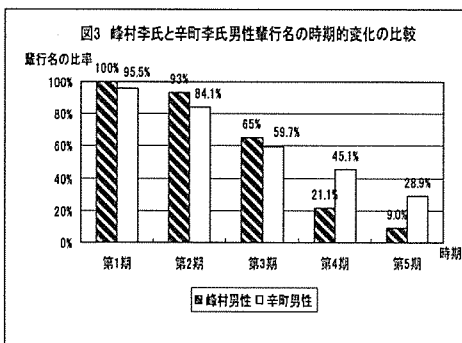
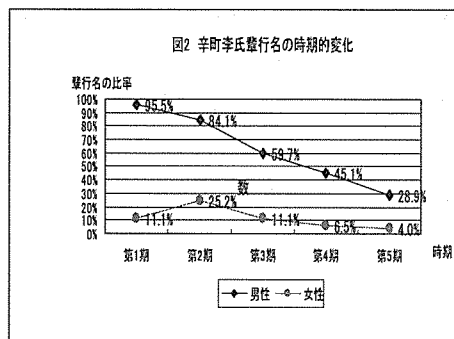
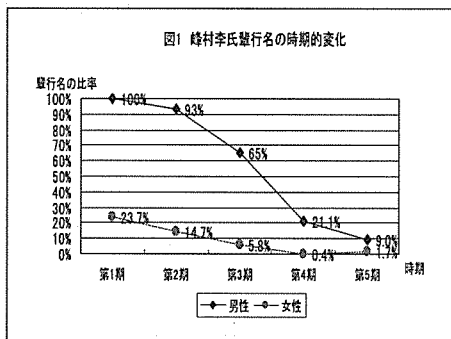
<sup>3)</sup> 筆者は峰村では2000年10月に1回、2003年8月から2004年9月にかけて3回、あわせて2ヶ月の実地調査を行った。辛町については2004年の9月と2005年1月にあわせて2週間ほどの調査を行った。人名由来については、両村合わせて200人のアンケート調査と約40人のインタビュー調査を実施した。

都市部と農村部との比較を行う。

#### 4. 1 輩行名の時期的変化

中国の家族、特に建国以前の家族は儒教思想が深く浸透している家父長制を実行していた（王愛静 2004）。輩行字による命名は宗族の血縁秩序が乱れないように保証し、各個人の権利と義務が履行されるものと意識させるための重要な手段であり、長年伝えられてきた重要な命名方式である（王愛静 2004：148－149）。李氏宗族は現在43世代目までの輩行字を定めている<sup>4)</sup>。輩行字に従って命名するかどうか、輩行名が占める比率の変化は、ある意味では宗族に対する意識の変化を反映するといえる。

図1は峰村李氏の輩行名の時期的変化を示している。男性の場合、第1期の人名はすべて輩行名であるのに対し、第2期の建国初期では若干非輩行名が現れたことが分かる。第3期の文化大革命時期になると、輩行名は3分の2に激減し、さらに第4期では5分の1にまで減少する。第5期になると、減少率は下がるが、全体の10分の1に満たない。女性の場合、第1期から第4期まで減り続けたが、第5期は、わずかながら逆転する現象が見られた。



<sup>4)</sup> 1926年に12世から27世までの輩行字を「基立方毓 志正丕興 一中相守 世可永承」と定めている。また、2002年に28世～43世までの輩行字を「徳紹先本 学良道明 勤信建業 広聯統恒」と決めた。

辛町李氏(図2)の場合、第1期ですでに非輩行名が見られる。第2期、第4期、第5期は緩やかな減少にとどまるが、第3期の文革時期では急激な減少を示した。

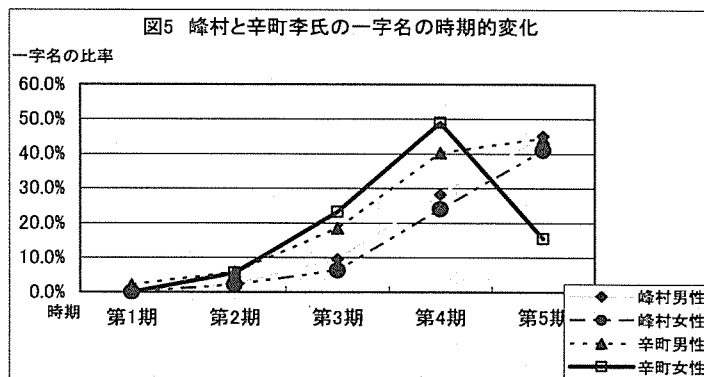
峰村李氏と辛町李氏の輩行名の変化を比較してみると、いくつかの相違点が見られる。男性の場合、図3で示すように、第3期までは、峰村李氏の方が輩行による命名率が少し高いが、第4期と第5期は、辛町李氏の比率が上回り、それぞれ峰村李氏の2倍と3倍になっている。また、第3期、第4期には峰村李氏が大幅に減少しているのに対し、辛町李氏の輩行名の変化はほぼ一定である。女性の場合、図4で示すように、辛町女性の輩行名の使用比率は、第1期では、峰村李氏よりかなり低いが、第2期から第5期までは、峰村より高い比率を示している。峰村李氏では第4期以降、輩行名を持っている女性がほとんどいなくなったが、辛町李氏の女性は、第5期まで輩行名を使用している。

#### 4. 2 一字名の時期的変化

図5からわかるように、峰村李氏の一字名は、男女とも第2期から増加し始め、第4期と第5期には大幅に増加し、女性の一字名の比率も各時期において男性より少し低いもの、ほぼ平行して増加している。輩行名の変化図(図1~図4)と照らし合わせてみると、第4期は一字名の激増と輩行名の激減が重なる時期である。第4期では、非輩行名である一字名の増加が、峰村における輩行名減少の原因の一つではないかと考えられる。

辛町では、一字名がもっとも増加したのは第3期と第4期である。とくに第4期では、女性名の半分近くが一字名になった。しかし、第5期になると、男性の一字名はわずかながら増え続けたのに対し、女性のほうは大幅に減少し、6人に1人程度になっている。

峰村と比較してみると、辛町の一字名は第4期までは峰村と同じように増加する一方であるが、占める比率は峰村の2倍近くになっている。第5期になると、峰村李氏の一字名は男女とも大きく増加しつづけるのに対して、辛町男性の一字名はあまり増加せず、女性のほうは逆に急減した。



### 4. 3 男性人名用字の時期的変化

表1と表2は、峰村女性と辛町女性における人名用字の上位20位を示している。両方とも、各時期総人名用字数のなかで占める1位の比率が、第1期から第5期にかけて低くなる傾向を示している。峰村女性について、1位の人名用字が全体に占める割合は、第1期から順に11.4%、10.3%、5.1%、5.6%、5%である。これは、女性の名前が多様化したために、1位の割には全体に占める比率がそれ程高くない結果になったと考えられる。また、第1期と第2期は「美」が連続して1位で、「秀」「香」「淑」「花」「英」などの女性らしさを表現する他の文字も上位を占めており、女性に相応しい文字として好まれていたようである。一方辛町女性は、第1期は「桂」、第2期では「華」が1位の座を交互に占めており、バリエーションがみられるが、ほとんどが女性の容姿や淑やかさをイメージさせる文字という点では、峰村と同様である。第3期になると、両村の女性とも、「紅」が上位に上がった。これは文革の「紅衛兵」の影響が強いのではないかとと思われる。「秀」「香」「美」など女性の容姿をあらわす文字は、相変わらず峰村女性の上位を占めているが、辛町女性では「華」「梅」「岩」などに代替されている。第4期と第5期では、上位20位までの文字のイメージが一新し、それまで少数派だった「静」「霞」「暁」「娜」「倩」「程」「蕾」「雅」「睿」などの文字が多く見られようになり、新しい時代の訪れを感じさせる。

表1 峰村女性人名用字ランキング

順位 美: 人名用字 11.43; 人名用字総回数の中での比率

順位	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期
1	美 11.43	美 10.33	秀 5.12	静 5.61	婷 4.98
2	香 6.67	秀 9.50	紅 4.85	艶 4.36	夢 3.83
3	秀 5.71	香 6.61	香 4.58	霞 4.31	倩 3.07
4	淑	淑 4.55	美 4.31	暁	暁
5	花	芳	霞 4.04	娜	甜 2.30
6	芳 4.76	花	英 3.77	文 3.43	祥
7	蘭	愛 4.13	梅 3.50	麗 2.80	峰 1.53
8	英	雪 2.89	春	燕	露
9	雲 3.81	英	瑞 3.23	雲 2.49	蕾
10	翠 2.86	瑞 2.48	雪 2.96	英	瑤
11	素	玲	雲	青	素
12	珍	華 2.07	花	雪	雨
14	君 1.90	翠	華 2.70	岩 1.87	貝
15	瑞	蘭	玲	倩	俊
16	梅	菊 1.65	燕 2.43	新 1.56	嬰
17	麗	霞	淑	紅	晨
18	君	月	波 1.89	玲	双
19	桂	梅	艶	程 1.25	艶
20	彩恵など	珍	芹彩	双芝	霞容
時期別人名用字総回数	105	242	371	321	261

表2 辛町女性人名用字ランキング

順位 連: 人名用字 2.07; 人名用字総回数の中での比率

順位	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期
1	秀 10.59	華 5.60	紅 5.44	曉 4.44	怡 6.97
2	桂 8.82	淑 4.81	華 4.08	娜 3.70	染 4.65
3	愛 7.06	愛 4.47	梅 3.40	静	丹
4	芳	玉 3.09	淑 2.72	艶 2.96	斐
5	淑 6.47	美	麗	欣	洋
6	貞 5.29	玲	莉	慧	倩
7	美	芹 2.74	岩 2.04	嬌	荷 2.32
8	英 4.11	麗	新	婷	雅
9	蘭	芬	暉	佳 2.22	露
10	華 3.52	雲 2.41	愛 1.36	紅	擘
11	雲 2.40	秀 2.06	燕	文	濱
12	珍	霞 1.72	霞	輝	琅
14	花 1.76	娟	曉	東 1.48	睿
15	恵	瑞	青	俊	筱
16	梅	香	朝	晶	莉
17	蓮	桂	蕾	鳳	萍
18	芬	英 1.37	宏	倩	森
19	徳 1.18	青	潔	傑	玉
20	欣	敏蘭	来など	韶	曉など
時期別人名用字総回数	170	291	147	135	43

## 5 峰村と辛町における人名変化の社会的・文化的背景

前節では農村部の峰村と都市部の辛町における人名形態の時期的変化を検討してきた。二村は、輩行名の減少、一字名の増加、女性名の普及、人名用字の新鮮化など、人名変化において多くの点で共通している。その一方、いくつかの相違も見られる。それらを表3の「人名変化」欄にまとめ、相違点を太字で示した。また、それらの変化の背景を探るために、人名変化をめぐる出来事を聞き取る実地調査を行い、峰村と辛町それぞれの社会的・文化的変化を考察し、その概要を表3に併記した。

### 5. 1 峰村と辛町における人名変化の背景の共通点

国家政策・政治運動が人名変化にもたらした影響については、王愛静（2004）でも検討しているが、峰村と辛町でも、次の点で共通している。一つ目は、社会組織・経済状況・家族構成・意識形態などの変化は、ある程度人の名づけに対する意識や名づけ方に影響をもたらしている。例えば、第2期では「国」「偉」「建」「紅」を使用した名前が上位になったことや、第3期にあたる文革時代に革命的な文字を使用した名へ改名したことは、建国と文化大革命の影響が強く働いたからといえる。また、第3期における輩行名の大幅な減少も、伝統よりは革命を最優先させた文革期間の「革命意識」と緊密な関係を持っていると言える。二つ目に、女性の名前には建国後二つの大きな変化が見られる。まず、全ての女性が大名を持つようになったこと、更に文字が多種多様になったことである。これらの変化について、女性の名づけには、今も昔も男性のような決まったルールがない分、柔軟性を持っていると言いつつも、女性の地位向上に伴い、社会・家庭での重要性が高まったことと大いに関連していると思われる。三つ目に、社会の変化が個人の名づけに与える影響は一律なものではなく、バリエーションに富んでいる。国家や村の変化から影響を受けると同時に、家族や自分の経歴、身近な出来事などの影響をも受けている。同じ非輩行名でも、付けた動機や理由は個々人の状況によって異なる。要するに、個々人が自分の状況にあわせ、多くの要素を斟酌し、選択し、名づけているようである。

### 5. 2 峰村と辛町における人名変化の背景の相違点

ここでは主に二村の人名変化の相違点について、村の歴史・地理位置、国家政策の影響、墓など宗族表象の運命、人々の主体的動き等から人名変化をもたらした背景を検討する。



表3 人名変化と国家政策・政治運動の背景

歴史時期	人名変化	インフォーマントが指摘した人名変化をめぐる出来事	峰村と辛町の社会的・文化的変化	中国の社会史・政治史の概要
第1期 (建国以前)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男性名がほとんど輩行名</li> <li>・峰村に正式な名がなかった女性が多い</li> <li>・辛町の女性には既に大名が普及、辛町男性に一字名が出現</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・輩行字以外の文字もあらかじめ決められた</li> <li>・年配の女性は自分の幼名の漢字や意味も知らない</li> <li>・辛町女性には既に大名が普及、辛町男性に一字名が出現</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・祠堂、祭祀用宗族有土地、祖先の墓、私立小学校などをもち、共同で祭祀、族譜編修などの宗族活動を行う</li> <li>・「男が外、女が内」という観念が強い</li> <li>・峰村の李氏人口は90%以上、辛町の李氏人口は2/3</li> <li>・ドイツや日本が建てた工場に辛町から多くの女性労働者を募集</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1897、ドイツが青島を占領</li> <li>1914、日本が青島を占領</li> <li>1937.7 抗日戦争開始</li> <li>1945.8 日本降伏</li> <li>1946.6 国共内戦開始</li> </ul>
第2期 (社会主義革命時期)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・男性の非輩行名と一字名が出現</li> <li>・女性名が普及したが、秀、華、愛などの文字に集中</li> <li>・男性の人名用字で「国」(峰村)「剛」(辛町)が1位</li> <li>・辛町女性の輩行名が増加、峰村女性を上回る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・墓の破壊によって祖先への畏敬の年が薄くなった(峰村)</li> <li>・親族同士は「同志」と呼びあい、名前を呼び捨ててのしる(峰村)</li> <li>・輩行名であるが、用字に気をつける</li> <li>・女性にも輩行名を付けた</li> <li>・名がなかった女性は生産隊の人に名を付けてもらった</li> <li>・都市戸籍登記のとき、女性に名付けられた(辛町)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・土地改革で祠堂、宗族所有土地が没収され、分配された</li> <li>・峰村の墓は1958年5月大躍進運動の中で破壊された</li> <li>・1958年辛町の墓は移転・保全された</li> <li>・異なる「階級」に区別され、親族関係にあった人が「敵対階級」になった</li> <li>・1958年に人民公社が設立され、男女平等で集団生産に参加するようになった</li> <li>・1951年辛町では都市戸籍管理が行われた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1949.10 中華人民共和国成立</li> <li>1950.5 「中国人民共和国婚姻法」公布</li> <li>1952 土地改革全国で完了</li> <li>1953.7 全国人口登記調査開始</li> <li>1956.12 新民主主義青年団、七年間農村青年の文盲一掃を決議</li> <li>1958.1 中華人民共和国戸籍管理条例發布</li> <li>1958.5 大躍進運動始まる</li> <li>1958.8 人民公社設立を決議</li> <li>1959.7 「反右傾闘争」開始</li> <li>1963.5 四清(政治、経済、思想、組織を清める)運動を指示、級闘争を強調</li> </ul>
第3期 (文化大革命時期)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・輩行名が激減</li> <li>・一字名が増加</li> <li>・男性の人名用字「涛」「偉」「紅」が上位</li> <li>・女性の人名用字は「紅」「華」が上位に。辛町女性の人名用字のほうがバリエーションがある。</li> <li>・辛町女性輩行名の比率が峰村より高い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自主改名</li> <li>・革命を意味する名をつける</li> <li>・大名は輩行名だが、輩行字以外の文字には気を配った</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1966年秋、紅衛兵運動が開始。「主子」「位牌」家譜が引き裂かれ、焼却された。</li> <li>・「黒五類分子」は差別された。</li> <li>・「四世同堂」などの大家族が分家で減少。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1966.5 プロレタリア文化大革命、本格的に始まる。</li> <li>1966.8 破旧立新的思想大革命の紅衛兵旋風 四田を打破、四新を設立</li> <li>1976.10 葉劍英らが「4人組」逮捕。</li> </ul>
第4期 (経済改革開放前期)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・輩行名はさらに減少、峰村女性の輩行名はなくなる</li> <li>・一字名が増増</li> <li>・峰村男性から「国」「紅」「偉」などの文字が20位から消える</li> <li>・目新しい人名用字の登場</li> <li>・辛町輩行名の比率は男女とも峰村より高い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・名前に子供への期待を込めたい</li> <li>・子供の数が減少、輩行字が維持しにくい、必要がない</li> <li>・映画の名づけへの影響(豊名、外国人風の名)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・墓参り、祭祀、葬式などの古い習慣が復旧し始める</li> <li>・80年代末、核家族が大多数を占める</li> <li>・1979年、一人っ子政策が実施され、子供の数は3、4人から1、2人に減少</li> <li>・1983年、人民公社が解体、家庭請負制が導入される。農民の収入が向上</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1978.3 新憲法採択、改革・開放政策への転換</li> <li>1978.12 中共11期3中全会、鄧小平の指導権を確立し、路線の大転換をはかる</li> <li>1979.1 一人っ子政策開始</li> <li>1980.9 中共中央、農産生産責任制の強化を討議、戸別請負を正式承認</li> <li>1985.6 人民公社の解体完了</li> <li>1989.6 天安門事件。改革と開放路線後退</li> </ul>
第5期 (改革開放深化期)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・輩行名はさらに減少したが、変化が緩やかになった</li> <li>・峰村の一字名は増加し続け、辛町の一字名が減少</li> <li>・人名用字が新鮮化</li> <li>・辛町の輩行名の比率は男女とも峰村より高い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・名づけにはさまざまな要素を考慮した上で決める</li> <li>・画数や五行を調べて名づける現象が見られる</li> <li>・娘だが、輩行名をつけたい(辛町)</li> <li>・一字名は同姓同名になりやすい(辛町)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・峰村の耕作地のほとんどは工業用地になった。</li> <li>・1999年、峰村では新しい「公墓」が選ばれる</li> <li>・2001年、辛町李氏は墓の2回目の移転を契機に、専用墓地を有することになった</li> <li>・後代の16字の輩行字が定められた。辛町支族の族譜は再編できたが、峰村李氏のは準備中である</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1992、鄧小平「南巡講話」改革開放が本格的に</li> <li>1995、2010年長期目標提起、出稼き農民激増</li> <li>2001.5 「国民経済と社会発展の第15回五年計画における城鎮化発展重点項目の印刷配布についての通知」發布。都市・農村間の就職上の差別をなくす方針</li> </ul>

### 5. 2. 1 両村の歴史・人口構成が命名意識への影響

封建社会では、儒教の教えが厳しく、族内の血縁秩序が重要視されていたため、二村の李氏宗族ではいずれも輩行字を使用して命名することが厳守されたようである。建国後、特に土地改革時期や文化大革命時期には、宗族意識が批判されるようになった。そのような時代の中で峰村と辛町が異なったのは、峰村に他姓族がいないため、村内の対立は即ち族内セグメント間あるいは同一セグメント内の対立となったのに対し、辛町李氏は以前から他姓との共存・競争をはかりつつ、李氏支族を発展させてきたことである。峰村李氏は、すべて同一族内で反右派闘争や「黒五類」の批判などが行われた。「親族の情は共産党の政策に勝てないんだ。右派の子孫としては、人よりも国への忠実心を示さなければならない。祖先の墓さえいらぬなら、祖先が残した文字を捨てても、なんの未練もない。」と祖父が右派であった峰村の「軍」は語っている。一方、辛町李氏は細かなセグメントには分かれず、皆同じ祖先の子孫だという考えが強かった上、建国後の政治運動の相互摘発・批判は、宗族内部に向かうより他姓を批判の対象とする傾向にあったようである。このことも、建国後、支族でありながら、李氏故里である峰村より強い宗族の絆を維持し得た一因ではないかと考えられる。宗族秩序の表象である輩行名が、峰村李氏より辛町李氏のほうが優勢を保っている歴史的背景の一つではないかと思われる。

### 5. 2. 2 両村李氏の宗族表象である祠堂、墓の異なる運命

2で述べたように、建国以前、峰村李氏と辛町李氏支族とも宗族の祠堂、墓地を有していたが、建国後、宗族意識が批判され、祠堂位牌などは古いものとされていた。さらに、1950年に「中華人民共和国土地改革法」が施行され、祠堂の土地も没収される対象になった。二村の李氏祠堂は、いずれも没収され、祠堂に祭られた先祖の「位牌」などは「封建的遺物」として焼却された。ただし、峰村の李氏祠堂は1963年に倒壊したまま、再建されず、祠堂用地が住居に建てかえられたのに対して、辛町李氏の祠堂の建物は現在も辛町の村委員会の事務室として残されている。最近では、そこを李氏祠堂に復元しようとする動きが見られる。

祠堂だけではなく、峰村李氏の墓地も壊滅的な運命にあった。峰村では、先祖は代々各家庭の農耕地に埋葬されていた。1958年の大躍進運動の中、土地が公有化され、より多くの土地を農業生産に使うため、峰村では国家の「向死人要地」（死亡した人から土地をもらう）の呼びかけに呼応し、「起墳」（墓を破壊する）運動が起こった。土を丸く盛り上げて作られた墓に対し、その土饅頭を平らにし、中の煉瓦と棺を取りだし、残った白骨はそのまま放置したりして、穴を埋めて、その上に農作物を植えた。このよう

に代々畏敬の念をもって大切にしてきた墓が破壊され、その形跡は完全に消えてしまった。そのため1958年以降、峰村では墓参りが事実上不可能になった。年配の方鑽は「自分の祖先の墓を掘らせることは、本当は情けなかった。しかし、共産党の指示だから従うしかない。そうでなければ、社会主義建設を妨げる罪を背負わされたから、そうするほかなかった。」と、当時の複雑な気持ちを述べた。1978年に峰村委員会が耕作地に使わない土地を墓地用地と決め、人々は記憶を頼りに祖先のものと思われる遺骨を掘りだし、公墓に埋葬したが、安置できた遺骨は大体直系祖先のもので、始祖や遠い祖先は名前さえ記録されてない。さらに1999年には、産業開発のため、墓地を移動しなければならなくなった。墓の移動や費用は全額個人負担だったため、直系子孫が生存していない人々の墓はそのまま破棄された。人々に対し、このような墓の破壊と粗末な安置は、宗族組織や宗族関係というものは時代遅れの古臭いものだという認識を持たせたと考えられる。このような状況の中で、輩行字命名そのものは政権から禁止されたわけではないものの、宗族概念を連想させるものではないかと恐れる人が出てきてもおかしくはなかった。

辛町李氏の先祖の墓は、峰村のように、各自の農耕地に建てられていたのではなく、山に宗族の墓地が建設されていた。そのお陰で、大躍進の時に、破壊されることはなかった。また、1958年工場の規模拡大の際、墓地を移転させることになったが、峰村の全面的な破壊と異なり、青島市政府の「地を以って地を交換する」という指示により、遺骨すべてが別の高地に移転された。しかも、墓を移転する際には、破損した棺を新しくし、石碑を建てた。さらに2001年には、営利性公墓を建てるため、辛町李氏の墓地が再び移転されることを機に、辛町李氏宗族の専有墓地が建てられ、始祖をはじめ600近くの遺骨が祖先の支派・世代の長幼秩序に従って安置された。この点も現在死亡した順番で埋葬している峰村墓地との大きな違いの一つである。現在辛町李氏専用墓地は、始祖をはじめとする先祖を偲ぶ場であり、一族であるという意味を確かめる場所ともなっている。墓地の有無および墓を巡る人々の動きの違いは両村李氏の宗族意識に異なった影響を与えたことが推測される。これは第3期以降、辛町李氏の輩行名の比率が峰村李氏を上回る背景の一つではないかと考えられる。

### 5. 2. 3 女性の社会進出、人口登記政策と女性名の普及

女性名の普及は女性の社会進出と大きく関わっているようである。建国以前は女性どころか、男性も外部との連絡は少なかったようである。それに対し、辛町の多くの李氏女性が20世紀初めにはすでに外国の工場で働くようになっていた。彼女たちは、これを機に多くが大名を持つようになった。例えば秀英（1917）、秀美（1920）、桂香（1923）、

徳芬（1927）などは紡績工場で勤務した時につけられた名前だそうである。一方、峰村は建国以前、多くの女性には正式な名がなく、「〇〇氏」で登録され、50年代後半の集団生産生活が始まってから自分の名前を持つようになった。辛町の女性より随分遅れている。<sup>5)</sup>

辛町女性が早くから正式な名を持つようになったもう一つのきっかけは、戸籍管理の実施である。1951年7月、中国では初めての戸籍管理条例『都市戸籍管理暫定条例』が制定された。辛町における戸籍登記の際、名を持たなかった女性はみな大名を持つようになった。例えば1910年生まれの人1人の女性は「玉美」と名づけられ、1904年に生まれた「李王氏」も「王秀蘭」と名づけられた。

#### 5. 2. 4 墓の再建と族譜の編纂に対する二村李氏の異なる対応

以上は二村李氏の歴史、人口構成、国家政策・政治運動など客観的な要素から二村の人名変化に与える影響を検討してきた。確かにこれらの影響は大きいですが、その一方で、こうした社会変動の中、人々の主体的活動も無視できないと考えられる。特に、墓の保存、族譜の再編纂において、二村李氏の異なる対応は宗族の団結力、親和力の相違を示し、輩行名の命名に対する認識、名付けという日常的行為に大いに関連していると思われる。

前に述べたように、峰村李氏の墓は人民公社時代に全壊された。当時、不満、恐怖を抱える人があっても、社会主義の建設を妨げるといわれることを恐れ、従うしかなかったようである。その後、粗末な墓地が建てられ、90年代に移転させられたが、主に村委員会の決定で、個人が意見を述べるものがほとんどなかった。移転にあたり、費用が個人負担で、埋葬された先祖は各家庭が各自で行なうもので、一族としての計画的、統一的な行動が見られなかった。

辛町李氏の墓地も波乱に富んだ運命を辿った。前に述べたように、彼らは墓を移転するごとに、先祖の遺骨を確認し、なるべくもれないように埋葬することができた。とくに90年代に辛町李氏の専用墓地ができたのは、辛町李氏一族は青島市関係部門との間で何年間にも及ぶ交渉を続けた結果である。もともとは営利性共同墓地を開発建設することになり、建設用地の中にある李氏共同墓地に対し費用を徴収することを要求されていた。しかも、共同墓地の建設のため、辛町李氏の10余りの墓が破壊された。これに対し、祖先の墓と一族の利益を守ろうとする辛町李氏は、1993年、李氏族人が市政府に申し出を行い、97年、直接共同墓地管理所に意見を述べた。2001年、志聖を始めと

<sup>5)</sup> ちなみに、辛町李氏は第1期ではすでに非輩行名、新鮮な一字名がみられたが、それは外部との接触が早かったからではないかと思われる。

する20人からなる「辛町李氏墓地再建と族譜再編の連絡準備会」を結成し、族人全員の協力で、共同墓地管理所と七回も検討した。その結果、共同墓地の中に辛町李氏の族墓「長青園」を建設する協議書を結んだ。一年後、辛町李氏祖先はすべて新たなところに安置できた。さらに、辛町李氏は族人の積極的な賛同を得、6万円にのぼった個人の寄付金で、族譜の再編もできた。

族墓の再安置と支族譜の再編は、辛町李氏一族の団結、協力で実現したもので、同時に、それらの宗族活動により、一族の親和力、凝集力が高められた。以前は宗族の輩行字についてあまり関心を持たなかった者も、過去及び新たに制定された輩行字を心にとめるようになった。辛町には「興文璇」（2002年生まれ、女子）という女の子がいる。彼女の父は娘にもともと「文璇」と名づけたが、族譜の再編に参加しているうちに考えを改め、輩行字「興」を加えたいらしい。それに対し、峰村の族譜の再編はなかなか進まない。それは、本当に関心を持っていて、しかも出資や手間を惜しまず族譜の編纂の事業に携わる人が少ないからだという。「30代、40代の人はどうでもいいという態度を持つ人が多い。たとえ賛成しても、今の仕事をやめ、調査の苦勞に甘んじることはできないだろう」と族譜の再編に呼びかけている志密は語った。

もう一つ、これらの仕事のなかで、高い威信とリーダーシップを持つ人物の役割も欠かせない。辛町李氏出身の人には社会的地位が高い人や会社を経営する人が数多くいた。彼等は墓地の再建や新たな輩行字の制定、族譜の再編の活動に指導的な役割を果たした。峰村族譜の再編がなかなか軌道に乗らないもう一つの理由は、村の中で辛町の志聖のような高い威信とリーダーシップを持つ人物がないことであろう。

## 6 おわりに

峰村と辛町の二村は、建国以来、革命意識の高揚と宗族意識に対する批判に伴い、伝統的な輩行字命名の習俗が廃れてきて、輩行名が減少しつつある。その代わりに、輩行字に拘束されることが無く、新鮮で覚えやすい一字名は人気を得、二村の主な命名形式になっている。また、どの時期においても、社会の出来事にちなんで流行した人名あるいは人名用字があり、人名の時代性が見られる。女性名も付けられるようになり、時代を追うごとに多様化している。これらの点において二村は共通している。また、一般的に、都市地域では伝統的な習俗は早く廃れていき、新事物を早い段階で受け入れると考えられがちである。たしかに、辛町李氏では、早い時期で一字名と非輩行名があわれ、女性名が普及し、人名用字も峰村よりバリエーションに富んでいる。これは辛町が都市中心部にあり、外部との連絡が多く、情報が流通しているという都市部の性質に関連していると考えられる。しかしその一方、文化大革命時期以来、宗族の血縁秩序を象徴す

る輩行名の比率は峰村李氏より高くなっている。辛町李氏は社会変動の中、峰村より高い宗族結束力を示している。これはとくに墓の保護と族譜の再編などの出来事に反映している。そういったことも輩行名命名行為に影響していると思われる。国家政策と政治運動など外部の力が人々の行為を拘束するが、その裏側には、人々の主体的な動きも社会を動かす無視できない力になっているのではないかとはいえる。

今後は個人の視点を取り入れ、社会変動の中での個人の対応を考察し、社会変動が人々の日常生活に影響するメカニズムを検討したい。また、調査地域は限られているため、今回で明らかになったことをさらにほかの地域での研究で実証していく必要がある。

## 引用文献

- 袁裕業（1936）『中国古代氏姓制度研究』 商務印書館
- 王愛静（2004）「中国建国後の農村の人名の変化と国家政策・政治運動の背景—山東省における二つの農村の調査に基づいて—」『大阪大学言語文化学』 Vol.13 大阪大学言語文化学会 pp.145-160
- 王青山（1993）「藏族姓名的社会文化背景」『民族語文』1993年第5期 pp.16-45
- 王泉根（1988）『華夏姓名面面觀』 広西人民出版社
- 王大良等編著（1999）『趙錢孫李 中国大姓尋根与取名』 中国气象出版社
- 王泉根（2000）『中国人名文化』 團結出版社
- 徐健順・辛憲（1999）『命名・中国姓名文化的奥妙』 中国書店
- 徐悉艱（1991）「景頗族の姓名」『民族研究』70 1991.3 pp.25-32
- 徐俊元・張占軍・石玉新（1985）『貴姓何来』 河北科学技術出版社
- 趙瑞民（1988）『姓名与中国文化』 海南人民出版社
- 張聯芳主編（1992）『中国人的姓名』 中国社会科学出版社
- 納日碧力戈（1997）『姓名論』中国社会科学文献出版社
- 中生勝美（1999）「中国の命名法と輩行制」『名前と社会—名付けの家族史』上野和男・森二編 早稲田大学出版社 pp.176-196
- 八巻佳子（1994）「姓数の多い満州族」松本脩作・大岩川嫩編 『第三世界の姓名—一人の名前と文化—』 明石書店 pp.46-50